

主 題：受け入れられた者に問われる応答**聖書箇所：ローマ人への手紙 15章7節**

今朝、皆さんと一緒に見ていきたいのは、今月のみことばとして学んでいるローマ15:7のみことばです。タイトルにもあるように、受け入れられた者に問われる応答について学んでいきたいと思えます。ただ、その内容に入って行く前に考えてみてください。あなたにとって、一致するということはどれほど大切なものでしょうか？同じ神様によって救われて、同じ神様を愛する家族、兄弟姉妹とされた者たちが一致し続けることは欠かせないものだとは本当に信じているのでしょうか？よくご存じだと言われるかもしれませんが、みことばを見ていく時、神様はご自分の子どもたちが一つとなることを繰り返し求めておられました。例えば、旧約聖書にもこのように述べられています。詩篇133:1に「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんといい楽しさであろう。」とあります。また新約でも、イエス様ご自身も弟子たちのために祈ってこう口にしていました。ヨハネ17:20-21に、「:20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。:21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。」と。ですから、一致することは、神様の前にとっても重要なものでした。

ただ、もちろんこれは容易にもたらされるわけではありません。振り返ってみると、教会の歴史というのは、分裂や不一致という悲しい戦いの連続でした。使徒2章でイエス様が約束されていたとおりに、弟子たちの上に聖霊が与えられて、教会が誕生した後、その教会のうちに問題が生じるのにはそこまで時間はかかりませんでした。使徒6章がこんな場面で始まっています。使徒6:1に「そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でおざりにされていたからである。」と書いていました。キリストの福音によって、罪を赦された罪人たちが集う教会には、こうしていろいろな問題が起こっていました。その問題というのは、それぞれが互いの間で罪を犯すことだけが原因ではありません。教会には最初からいろいろな違いを持った人たちが集っていました。富む者もいますし、貧しい者、高齢者に若い者、男性や女性、国籍や文化、歴史の異なった者たち。同じ福音によって救われた多種多様な人たちが一つとされたからこそ、その違いというものが時にさまざまな問題を引き起こすことになったのです。

そして、特に顕著だったのが、ユダヤ人と異邦人との違いでした。聖書を読んでいくと、ユダヤ人と異邦人という二つのグループをいろいろなところで見ます。今の私たちにとっては、彼らの間にあった難しさというものがぴんと来ないかも知れません。でも、1世紀に戻って、彼らの立場に立って考えてみてください。彼らが救いへと導かれた時、すべてが白紙の状態から救いへと導かれたわけではありませんでした。彼らはユダヤ教など異教徒が取り囲んでいた環境の中で、何年も、何十年も生活し、そしてその過程で深く根づいた習慣や態度を身につけていました。彼らはそれぞれにあることを行ない、またあることを避けていました。そして当然、そのような習慣がクリスチャンになった瞬間、一瞬にして彼らから消え去ってしまうことはありません。例えば異邦人の中には、自分たちが暮らしている世界の一部であると見なされていた放縱な生活に嫌悪感を抱いて、救われた瞬間、それらすべてから全部離れて禁欲的な生活を送るようになった者たちもいました。ある人たちは、肉を食べることをいっさい断って野菜だけ食べると決めた者たちもいました。また、ユダヤ教から回心した人たちの中には、幼いころからモーセの律法を守り続け、そして特に安息日を厳格に守っていたような者もいました。そのような人々の中には、救われた後もその習慣を維持しようとする者たちがいたのです。そのような人たちが全員同じ教会に集って、神の家族として生きていこうとするのです。ある者たちにとっては、ずっとしてはいけませんと教

えられてきたことを普通に行う人たちがいて、ある者たちにとっては、それは絶対にしないといけませんよと教えられてきたことを全く行わないような者たちが中にはいたのです。彼らは確かにキリストにあってもう一つとされていました。しかし、実際の歩みにおいては、まだまだいろいろな場面で、いろいろな違いで分裂が起こっていたのです。

それがこれから見ていこうとしているローマの教会の中にもあった問題でした。15章から少し戻って14：1-3に「:1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。:2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。:3 食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。」とあります。違いを持った人たちがやって来ていました。考え方が違ったのです。その考え方は、彼らの生きざまから変わってきました。そして、そのような者たちがともに一致を目指して歩んでいこうとするのであれば、一致し続けて歩んでいこうとするのであれば、あることが求められました。何だと思いませんか？それが、互いに受け入れ合うということだったのです。今の私たちも同じです。私たちが救われて、この教会に集ったとして、皆さんがそれまでに過ごしてきた生き方はいろいろに違っているでしょう。やってきた仕事や勉強も違うでしょうし、育った家庭環境も違うでしょう。私たちはいろいろな違いを持っているのです。そのような者たちがともに集って、一致を目指そうとするのであれば、同じように互いに受け入れ合うことが求められます。

○互いに受け入れ合うこと：三つの要素

でも、具体的に互いに受け入れ合うとはどういうことでしょうか？そのことをきょうは三つの要素から一緒に考えてみたいと思います。その一つ目は互いに受け入れ合うという応答の内容、二つ目に原動力と模範、最後三つ目に目標です。これを順番に見ていきたいと思います。

まずきょうのみことばを先に見ておきましょう。

ローマ15：7

「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」

1. 応答の内容 7c節

早速、互いに受け入れ合うことに関して求められる応答の内容から一緒に考えてみましょう。普段、みことばを最初から見ることが多いですが、きょうは一番終わりから見てください。7節の終わりは、「あなたがたも互いに受け入れなさい」と締めくくられていました。はっきりと言われていました。提案や勧めがなされていたのではありません。選択肢の一つとして提示されていたのでもありません。みことばは一つの明白な命令を信仰者たちに与えていました。これは何を意味しているのでしょうか？互いに受け入れ合うとは、実際にはどんな姿を言うのでしょうか？

▶「受け入れなさい」

これを理解する上で鍵になるのが、ここで使われていた「受け入れなさい」ということばです。この動詞には、動作の継続を表す現在形の命令が、特に中動態という形で用いられています。中動態というのは、余り聞きなれないものだと思いますけれども、簡潔に言うと、これはその動作を行う主語にスポットライトを当てる意味合いが含まれています。ある行為を行う上で、主語となる人物がその行為に積極的また個人的に関わることを強調する意味合いを持っています。主語に強調を置くのです。つまり、ここで「あなたがたも互いに受け入れなさい」と言われた時、みことばは、あなたがた信仰者ひとりひとりが積極的にそれを行っていくことを求めていたというわけです。間違っても、ある一部の特定の人たちが話す話ではありません。互いに受け入れ合うということは、すべてのクリスチャンがみずから進んで、いつもなし続けていく、そんな生き方なのだというのです。

またこれに加えて、このことばにはもともと「歓迎する」とか「輪の中に受け入れる」といった意味だけではなく、「だれかを特別な関心を持って、自分のもとに迎え入れる」といった意味が含まれています。ことばの意味だけ見てもわかりづらいかもかもしれませんので、同じことばが使われる場所を見てみましょう。例えば使徒27：36-37に使われています。ここは、パウロが乗った船がひどい嵐に遭って、死にかけて後、パウロがことばをもって人々を励ましていたところです。「36 そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。 37 船にいた私たちは全部で二百七十六人であった。」とあります。ここで「みなが食事をとった」と訳されていることばが同じことばになります。ばらばらで食事をとったわけではありません。みなが集まって食事をとっていたのです。また、同じ使徒28：2を見ると、ここにも同じことばが使われています。先ほどの続きですけれども、嵐に遭った船が何とか島にたどり着いたその場面で、「島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。おりから雨が降りだして寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなをもてなしてくれた。」と書いています。そこで使われていた「もてなしてくれた」ということばが同じことばになるのです。島の人たちはみなを自分たちのもとへと招き、もてなしてくれました。そしてもう1カ所、ピレモン17節には、「ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼（オネシモ）を迎えてやってください。」と書いています。逃げ出した奴隷オネシモが獄中で救われ、彼を送り返すわけですけれども、パウロはオネシモのことを「迎えてやってください」と言いました。これが同じことばになるのです。

これらの箇所から、このことばが持っている雰囲気というもの、姿というものを読み取ることができるでしょうか？間違いなく言えるのは、この受け入れるというのは、受け身的な妥協によってなされているものではないということです。ましてや週に1回、日曜日の教会で歓迎のあいさつを交わすようなことでもありません。受け入れるというのは、非常に温かいものでした。しかもだれかに強制されてするものでもありません。人々が進んでみずから自分の輪の中にほかの人を招き入れて、そしてともに過ごそうとするのです。これはすごく大切なことでした。人々は自分たちから喜んで招き入れるのです。これがなぜ大切かというと、パウロたちが流れ着いた島の人たちの立場に立って考えてみてください。突然流れ着いて来た276人の人たち、しかもその多くが囚人でした。それを目にした時に、もてなすのではなくて、隠れてやり過ごそうという選択をしてもおかしくなかったでしょう。また、例えば主人ピレモンや教会の立場に立って考えてみると、自分たちのもとから逃げ出したオネシモを再び迎え入れることに、抵抗やためらいを覚えたとしてもおかしくはなかったでしょう。受け入れる相手がだれなのかということを考えて、自分の都合や自分の思いに身を任せてしまえば、犠牲を払って自分のもとに迎え入れることは、容易に躊躇してしまうものになるわけです。でも、みことばが求めていたことはそうではありませんでした。信仰者は相手に関わらず、みずからの意志で積極的に自分のうちに受け入れようとするのが求められていたのです。

神学者のひとり、レオン・モリスもこんな説明を残しています。「この動詞は、『会員資格を維持することを許可する』以上の意味を持っています。これは歓迎し、自分のもとへ引き寄せ、友として迎え入れるという意味合いを含んでいます。弱い立場の者たちが、かろうじて許容され、二流会員として見られていると感じるべきではありません。彼らは温かく、真の交わりをもって受け入れられるべきです。クリスチャンの愛は、それ以下のものを許さないのです。」と言っています。確かに私たちの間ではいろいろな違いがあります。それでもなお私たちは喜んで手を差し伸べて、互いを受け入れ、自分の友として交わりを楽しみ、自分の家族として一緒に歩んでいこうとするのです。

2. 応答の原動力と模範 7b節

これを聞くと、ある人はそんなの難し過ぎますと思うでしょう。考え方や価値観が自分とは全く合わないような人に対して、私は自分から積極的に交わりをすることはできませんと。どうしてもあの人とは馬が合いません、そう言うかもしれません。またある人は、うん、わかりました、互いに受け入れ合う

ことを日々実践していく、それはわかりましたと。でもその歩みというのは、より具体的にはどうしたらいいのでしょうか。もしそのような思いを抱いたのであれば、もう一度ローマのみことばに戻っていただいて、その答えすらみことばはきちんと与えてくれていました。7節の真ん中部分を見ると、そこに、互いに受け入れ合うことを行っていくための原動力と模範が記されています。7節の途中に「キリストが神の栄光のために、私たちが受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい」と書いています。キリストが「私たちが受け入れてくださったように」と。私たちが互いに受け入れ合うということを実践している時、その原動力、また模範となるものはほかのだれでもない、イエス・キリストでした。勘違いしてはいけないのは、これらのことは自分の力や知恵でなしていけるものではそもそもないということです。ましてや、それぞれの基準に沿って、自分が受け入れることができる、自分勝手な条件を設けるのでもありません。はっきりと言われていました。キリストが私たちが受け入れてくださったというこの事実に基づいて、キリストが私たちが受け入れてくださったように互いに受け入れ合おうとするのです。

●イエス様の示された“受け入れ”の特徴：

では、考えてみてください。果たしてイエス様はどのようにして私たちが受け入れてくださったのでしょうか？イエス様の示してくださったその“受け入れ”というのは、いったいどのようなものだったのでしょうか？もちろんいろいろなことを挙げることができます。でも、少なくとも三つの特徴というものをみことばから見て取ることができます。

1) 主導的なもの

イエス様の示された“受け入れ”の一つ目の特徴は、まず主導的なものでした。つまり私たちがイエス様を必死に求めたからではありません。イエス様ご自身が私たちに近づき、私たちに手を伸ばし、私たちが自分のもとへと招いてくださったということです。思い出してください。救われる以前の私たちはみな主から遠く遠く離れて生きていました。神様を忌み嫌う敵として歩んでいたのです。みことばはその姿を明白に描いています。コロサイ1：21に「あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあっただのですが、」と書いてありました。コロサイだけではなく、エペソ2：12にも「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」と書いていました。神様から少しだけ、一時的に離れていたわけではありません。その関係は完全に断たれ、遠く引き離されていました。かつて私たちは中立の立場にいたわけではありません。生まれながらに、私たちはみずからの意志で神様を拒み、みずからの意志で神様を憎む反逆者として生きていたのです。私たちの抱える思いというのは、神様に逆らうものでした。私たちの抱く考えというのは、神様に逆らうものでした。私たちの持つ願いや動機、またすべての行いに至るまで神様に逆らうものでした。キリストを知る前、私や皆さんひとりひとりも例外なく罪によってすべてが汚れ果てていました。罪を激しく憎まれている神様の前に、ただ滅ぼされてしかるべき御怒りを受けて当然の敵として歩んでいたのです。それこそが揺るがない事実でした。

でも、そんな私たちに対して神様が測り知れない恵みを示してくださったのです。私たちが折れて向かってきたわけではありません。いつまでも頑なで遠く離れ続けていた敵であった者のために、神様が進んで愛を示し、ご自身のひとり子であるイエス・キリストを送ってくださいました。そして人となられた御子はみずから十字架にかかり、流されたその血でもって罪の赦しを、和解のみわざを成し遂げてくださったのです。聖書は、ローマ5：8-9で「:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」と言っていました。そして、先ほど読んだエペソ2：12の続き13節にはこう書いてあります。

「しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血に

よって近い者とされたのです。」と。遠く離れていた私たちには決してできないことを、あわれみ深い主が代わりになしてくださいました。神様から遠く離れていた者が、ただキリストにあって神様の御前を歩む者へと変えられました。神様の御怒りにのみふさわしかった者が、ただキリストにあって神の家族の一員へと受け入れられました。神様の敵だった者が、ただキリストにあって神様との間に平和を、和解を持つ者へと変えられました。私たちがそのことを望んだ結果ではありません。私たちがイエス様のことをどうにかして見出したのでもありません。そうではなく、私たち自身が主を拒み、主から距離を取っていた、その時に、主ご自身がご自分を私たちに与え、私たちをご自分のもとへと招いてくださったというわけです。私たちがなしたことはありませんでした。これが、イエス様が示してくださった主導的な“受け入れ”でした。

そしてこの事実を私たちが覚える時、この主の姿を覚える時、私たちも同じ”受け入れ”を示したいと思わないでしょうか？あふれんばかりの愛と恵みに感謝するからこそ、私たちもみずから進んで手を伸ばし、イエス様のように、だれであろうと迎え入れようとするのです。

2) 犠牲的なもの

次に、二つ目の特徴は、犠牲的なものでした。イエス様にとって受け入れるということは、何の痛みも伴わない、何の困難も伴わないものだったのでしょうか？イエス様にとって受け入れるということは犠牲を伴わない、容易なものだったのでしょうか？そうではありませんでした。私たちをご自分のもとへと招くために、私たちには到底理解できないほどの犠牲を、この方は払われたのです。ヨハネの福音書を通して学び続けていますが、イエス様は疑いようもなく栄光にあふれた神様ご自身でした。昔も今もこの先も変わる事のないまことの神様でした。この方こそ、すべてが存在する前から存在し、圧倒的な力を持って世界のすべてを造った永遠の創造主だったのです。そしてこのお方が私たちを受け入れるために、人としてこの世に來られました。人としてこの地上を歩み、あわれみ深い忠実な大祭司となるため、さまざまな困難や苦しみにまで遭われたのです。全能の力を持ったお方が、ある時、疲れや弱さを覚えて休息を必要とされることもありました。文字どおり、だれの助けも必要としない、人の手によって仕えられる必要など全くないそのお方が、ある時、飢え渴きや弱さを覚えることもありました。罪を犯すことは決してありませんでしたが、それでもすべての点で主は私たちと同じように試みにも遭われ、ひどい苦難さえ味わったのです。

そして、これらのことすべてに加えて、イエス様は十字架の死にまでも従順に従い、最後にはご自分のいのちをささげてくださいました。もちろん十字架の上で味わった肉体的な痛みも、私たちの想像を絶するほどの痛みでした。でも、それ以上に、イエス様はひどい苦しみをそこで味わわれました。神様によって、イエス様は呪われた者となられたのです。みことばはこんなふうに述べていました。ガラテヤ 3：13に「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである」と書いてあるからです。」とあります。よく考えてください。栄光に満ちあふれた御子ご自身が十字架で死なれました。本来、すべてのものからたたえられるべきその御子が、そのからだに肉体的に激痛を覚え、辱めを受け、そしてその上に呪われた者となられたのです。永遠の初めからこの方は神様でした。人となられた時ですら変わる事のない神の栄光の輝きでした。でもこの方が父なる神様の呪いや御怒りというものを、私たちの代わりに受けられたのです。ただ賛美にのみ値するお方でした。でも、そんなイエス様が自分自身のことをいっさい顧みることなく、喜んで十字架にかかりました。罪の全くないお方が、永遠の初めから持っていた父なる神様から拒絶され、交わりから引き離され、そしてその身に御怒りを受けられたのです。だからイエス様は十字架で叫ばれていました。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27：46)と。このことばを叫ばれたイエス様、いったいどれほどの苦しみを味わっていたでしょう。神のひとり子はどんなに大きな犠牲をみずから進んで払ってくださったのでしょうか。私たちが決して忘れては

いけないこと、それは私たちが受け入れられるために拒絶された方がいるということです。この方の拒絶がなかったとしたら、私たちは受け入れられることはありませんでした。神の御子であるイエス様は、父なる神様に見捨てられ、ご自身のいのちをささげることを通して、信じるすべての者をご自分のもとへと迎えてくださったのです。それが、主が払ってくださった尊い犠牲でした。大きな愛というものが示されたのです。

そしてこの愛を私たちが受けたのであれば、このようにして私たちが受け入れられたのであれば、私たちはどんな犠牲を払って、愛をもって互いに受け入れ合おうとするのでしょうか？ 私たちはどんなものを犠牲にできないと言って、受け入れることを拒むのでしょうか？ もしかしたら、ある人はこんな恐れを持っているかもしれません。自分が手を差し伸ばしたとしても、拒まれてしまうかもしれません。自分は受け入れたいと思っても、相手はそれを望まないかもしれません。そして、実際にこれまでの歩みの中で、だれかに拒絶されたことがある人もいるでしょう。だれでも拒絶されることはうれしくないのです。だから私たちは一度拒絶されてしまうと、何度も拒絶されてしまうと、そんな経験をもうしないようにとあきらめたり、ためらったりしてしまう、そんなこともあるかもしれません。でも、もしそうなのであれば、私たちはイエス様の姿を思い出さなければいけません。イエス様は、父なる神様に拒まれました。そして私たち自身も、この方を頑なに拒み続けていました。私たちがこの方を拒んだ回数は測り知ることができません。それでもなお主は、文字どおり私たちのためにご自分を喜んでささげてくださり、愛を示してくださったのです。キリストが私たちを受け入れてくださったように、互いに受け入れ合うということ、これは容易ではありません。いろいろな費用やいろいろな犠牲が伴います。なぜかということ、私たちを受け入れてくださった方が犠牲を払ったからです。この方に似た者として歩んで行こうとするのであれば、だれよりも大きな費用を支払ってくださった方にならって歩んで行こうとするのであれば、私たちは必ず費用を払うことになります。それでもなお私たちに到底理解できない大きな費用を払って迎え入れてくださった方がいることを覚えるのであれば、感謝を持って、その方の命令に従って行こうとするのです。

3) 分け隔てのないもの

主が示してくださった“受け入れ”、それは主導的なものであり、犠牲的なものであり、そして最後三つ目は分け隔てのないものでした。イエス様は相手を見て、自分のもとへ迎え入れるかどうかを選ばれていたわけではありません。イエス様は人々の目や意見を意識して、ある者を受け入れ、ある者を拒んでいたのではありません。イエス様はみずから進んであわれみを持って、すべての者にご自分の手を差し伸べようとされていたのです。例えば、1世紀の社会にあって、最も忌み嫌われていたと言っても過言でない取税人という存在。アンケートを取ったら、ほぼ全員が嫌いな人のランキングで一番に挙げるような取税人と、イエス様は食事をもにすることを進んでなしていました。その光景を目の当たりにしたパリサイ人たちは、こんな文句を言っていたことがありました。マタイ9：10-11にこう書いています。「:10 イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっしょに食卓に着いていた。:11 すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人といっしょに食事をするのですか。」と。もし仮にイエス様が自分の地位や賞賛というものを追い求めていたとしたら、もし仮にイエス様が人々の目を恐れていたとしたら、取税人や罪人と時間を過ごすより、人々の間で尊敬されていたパリサイ人とともにいることを選択していたかもしれません。でも決してそうはなさいませんでした。むしろイエス様ご自身は、彼らの問いに対してこう答えたのです。続く12-13節にこうありました。「:12 イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。:13 『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」と。医者として来られたお方は確かに助けを必要とする弱った者たちにその手を差し伸べられていまし

た。たとえ周りのだれもが関係を拒むような、周りのだれもが関係を忌み嫌うような相手であろうと、イエス様は自分のもとへと招こうとされていたのです。

イエス様の深いあわれみは取税人だけにとどまるものでももちろんありません。それはツアラアトに犯されていた者にも及んでいました。マルコ 1 : 40 - 42 にこんなふうに書いています。「:40 さて、ツアラアトに冒された人がイエスのみもとにお願いに来て、ひざまずいて言った。「お心一つで、私をきよくしていただけます。」:41 イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって言われた。「わたしの心だ。きよくなれ。」:42 すると、すぐに、そのツアラアトが消えて、その人はきよくなった。」と。この場面のすごさを今の私たちは余りわからないかもしれませんが。でもこれは驚くべきことでした。なぜかと言うと、この当時、ツアラアトという病気は感染力が非常に強くて、治療法もいっさいなければ、汚れをもたらすものとして人々の間で扱われていたのです。この病に侵された人がだれかの家のところに行って、ドアから少しでも首をのぞかせるようなことがあれば、それだけでその家全体は汚染されてしまうと言われていました。だからこそこの病を負った者たちは、身体的にも社会的にも人々の間から完全に除外されていた存在だったのです。町の人たちだけではありません。汚れをもたらすから、家族や友人でさえ近寄ろうとしませんでしたし、だれにも近寄ることを許しませんでした。そんな人物がここでイエス様のもとにやって来て、助けを乞い求めていたのです。イエス様はいったいどのように応答していました？嫌悪感を持ってあしらっていたのでしょうか？見て見ぬふりをしたり、無関心を装っていたりしたのでしょうか？いいえ、イエス様はその人から身を引くようなことはされず、代わりに自分から手を伸ばして彼に触られたのです。それがあわれみ深いイエス様の示した“受け入れ”でした。

すごいのは、イエス様はこの病人に対して、病気を治してから自分のもとに来なさいとは言われませんでした。負っている苦痛や重荷というものを、まずは自分でおろしてから自分のもとに来なさいとは言われませんでした。むしろイエス様はその状態のままで自分のもとへおいでと招いておられたのです。私たちもよく知っている箇所の一つ、マタイ 11 : 28 - 29 にこう書いています。「:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」と。重荷をおろして来なさいとは言われませんでした。重荷を負ったままでいいと。疲れた人に休んでからおいでとは言われませんでした。疲れた人はそのままやって来ればいいと。すばらしい約束、喜びだと思いませんか？主が示してくださった優しさというもの、主が示してくださった寛大さというもの、それはどれほど大きいものだったでしょう。ひとりの先生も、この点に関して次のようなことばを残していました。「これがキリストの歓迎です。困窮している者、疎外された者、問題を抱えた者、罪深い者に近寄られます。嫌悪感を抱いて身を引くことも、距離を置くこともありません。キリストはまず最初に行動し、近づき、心を動かされ、手を差し伸べ、癒し、回復させます。これがキリストが私たちを歓迎するという意味です。そして、これが私たちが互いに提供すべきものなのです。」とされています。

立ち止まって、自分の歩みを振り返ってみてください。果たして私たちの“受け入れ”は、こんな特徴を表すものでしょうか？大切な質問は、私が示しているその“受け入れ”でもってキリストに受け入れられたいと、今あなたがそう望むでしょうか？キリストを信じ救われた私たちは、既にキリストに受け入れられました。何にも勝る最高の関係にもう入れられたのです。だからこそそのすばらしいみわざに対する感謝を原動力として、何よりも喜びの応答として、私たちは互いに受け入れ合おうとするのです。この互いに受け入れ合おうということは、絶対に自分の力ではできません。キリストの“受け入れ”を知らなければこれはできません。キリストは主導的に、犠牲を払って、分け隔てなく、ご自分のもとへ人々を招こうとされていました。その方に受け入れられたということを、私たちは原動力として感謝して、その模範にならって歩んで行こうとするのです。

3. 応答の目標 7 a 節

そして最後に、ここまで学んできたように、私たちが、キリストが受け入れてくださったように、互いに受け入れ合うことを実践していくのであれば、ある効果が私たちの間で見られるようになっていきます。もっと言うと、この効果が生み出されることを私たちは何よりも一番の目標として目指していくのです。いったいどんな目標かと言うと、それは神様の栄光が現されることです。ローマ 15 : 7 に「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」とあります。もしだれかが、私たちは神様の栄光をどこで目にすることができますかと尋ねてきたら、どのように答えるでしょう？ある人は「自然界を見てください」と言うかもしれません。私たちの周りにある被造物を見てくださいと。それも確かに間違っていない。自然を目にする時、私たちはそこに神様の力を、神様の知恵を、神様の不思議さというものがあふれているのを見ます。みことばははっきりと述べていました。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」(詩篇 19 : 1) と。確かに私たちの周りを見渡す時に、神様の栄光を見て取ることはできます。でも、同じみことばは別の答えをも与えてくれていました。神様の栄光は別の場所でも見て取ることができる。これはどこだと思います？それが教会でした。

キリストが受け入れてくださったように、神の家族が互いに受け入れ合うのであれば、そこには神様の栄光が現されるようになるというのです。でも、それもそのとおりだと思いませんか？これまでの内容を踏まえて考えてみてください。正直、キリストのように受け入れ合うということは容易なことではないと思ったと思います。多くの犠牲を伴うものでした。自分が心を素直に開いたとしても、相手からは拒絶されるかもしれないものでした。それを知っているからこそ、私たちの性質は自分を守るために殻に閉じこもろうとしたり、痛みや混乱を避けるために、受け入れることに自分の基準を勝手に設けたりすることがあるのです。でもそんな中であって、私たちがキリストにならって犠牲を払い、分け隔てることなく、互いに受け入れ合うということを本当に実践していくのであれば、そこには神様の栄光が最も現されるようになります。なぜかと言うと、それはその働きを可能にしてくださるのは、絶対に自分ではなくて、神様だけだということが明らかにされるからです。私たちの信仰生活の目的は何ですかと問われれば、私たちは口ぐせのように、神様の栄光を現すために生きていますと言います。私たちが神様の栄光を現していくためにできることは、互いに受け入れ合うということです。私たちが自分の力ではなくて、神様に頼りながらキリストの模範を覚えて、キリストに感謝しながら互いに受け入れ合っていくのであれば、そこにこそ神の栄光は現されると、みことばははっきりと教えてくれていました。

だとすると、果たして私たちはキリストの最高の“受け入れ”を味わった者として、心を開いてみずから手を差し伸べることを喜びとして歩んで行こうとしているのでしょうか？私たちのためではありません。神様の栄光を現していくという、ただその目的のために、互いに受け入れ合うことをなしていきたいと、願っているのでしょうか？愛する主が私たちの弱さや愚かさを耐え忍んでくださったのであれば、私たちもお互いの弱さに心から寄り添って歩むことが求められます。私たちが完璧だったからでも、欠点が見当たらなかったからでもありません。主が私たちから何かを見返りに得ようと望んだからでもありません。主は私たちが遠く離れて敵であったその時、私たちを愛し、神様の栄光を現すその目的のためにご自身をささげ、私たちを迎え入れてくださったのです。この姿を覚える時に、私たちは感謝しながら、賛美しながら、この模範にならって歩んで行こうとするのです。同じ目標を目指して歩んでいこうとするのです。神様は一致を愛されてきました。一致するためにはお互いに受け入れ合うことが欠かせませんでした。神様の栄光を現す、その目的のためにイエス様の模範にならってともに歩んで行きましょう。